

第1468回（7月3日）

一農婦の生活史

石原豊美

大正末年に愛媛県周桑郡に生まれたひとりの女性の生活史を紹介した。

この女性(Tmさんとよぶことにする)と報告者は、1987年4月から89年6月にかけて70回以上の接触をもち、Tmさんの生活史の再構成——Tmさん自身の手で書かれた生活史というかたちでの——を試みた。Tmさんの記憶と、Tmさんがこれまでに書いてきたいくつかの記録資料とが、生活史を再構成するにあたっての有力な素材となった。また、書き手としてのTmさんに対して報告者はその促進者の役割をもった。

Tmさんの生活史は、大きく3つの時期に分けることができる。

第1期は、大正末(1926)年、K家の第5子第4女としてTmさんが生まれたときからはじまる。K家ではTmさんのあとさらに2女2男が生まれ、Tmさんは小学校5年生のときに生まれた末弟の子守りをした。また、その頃周桑一円で養蚕に代わって農家の副業として導入された吐織りも、Tmさんら農家の子女の仕事であった。Tmさんが家政女学校へ通うようになった翌年、日本は太平洋戦争に突入した。Tmさんは女学校で「お菜なし」の弁当を食べた経験をもっている。また、青年団で陸軍病院へ慰問に行ったり、竹槍訓練なども経験した。兄の応召、渡満により、家に残った女きょうだいで牛耕をしたこともTmさんには強い印象となって残っている。

第2期は、昭和22(1947)年にTmさんが久妙寺へ「嫁入り」したときからはじまる。このときTmさんは、小学校時代の先生からもらった手紙にあった「わが身は雑巾になれ」という言葉にしたがわざるを得なかったという。結婚の翌々年、Tmさんの嫁いだ家は火災に遭う。Tmさんの家ではこの火災による経

済的負担を乗り切る必要もあり、それまでの米麦作に加えて葉タバコ作を導入する。葉タバコの選別作業を得意としたTmさんは、「調理師」として他の家に雇われるようになった。

第3期は、昭和38(1963)年、義父からTmさん夫婦が「世渡り」を譲り受けたときからはじまる。(もともと、それより先にTmさんは生活の長期的設計をたてる必要を感じていた。子育てに共通の悩みをもつ母親仲間でサークルを作ったり、またNHKのラジオモニターになったりもしている。)葉タバコ作から施設園芸(きゅうり作)へ、さらにオイルショックを契機として電照菊へ、と経営の転換をはかりながら、Tmさん夫婦は農業に従事しつづけてきた。また、この時期大きく変貌した農村にあって、Tmさんは回覧ノートや新聞の投稿欄や日誌に日々の生活のなかで気づいたことを書きつづけてきた。報告者は、この〈書く〉経験が、Tmさんの生活史を特徴づけるひとつの重要なポイントではないかと思っている。この点も含めてTmさんの生活史のさらなる分析を他の機会に行ないたい。

なお、ここでTmさんとよんできた女性の生活史の詳細については、すでに日本経済評論社より出版されている『農婦』(永井民枝著、1989年)を参照していただきたい。